一つの言葉に対する意味理解：「陰キャ」は何を意味するか

佐藤大青

はじめに

近年SNSの急速な普及により、他人の意見に触れる機会は確実に多くなっている。その利点が強調される一方、延々と噛み合わないままの議論を見かけることも多くなったように感じる。またSNSに限らずとも、日常の些細なコミュニケーションにおいてさえ「私は相手の言ったことを理解しているのか？」「相手は私が言ったことを理解しているのか？」とモヤモヤすることは少なくないように感じている。

私はこれらの問題の原因が「一つの言葉に対して自分と相手が異なる意味理解をしていること」にあると考えた。それにより、二人が同じ言葉を使っても情報の伝達に齟齬が生じてしまうのである。

そこで今回はある単語を提示し、その単語についてどのような理解をしているかのアンケートを取ることにした。**一つの単語について異なる意味理解がされているかを検証する。**されているのであればそこにはどれくらいの幅が生まれてしまっているのかを考察する。

今回のアンケートで提示する単語は「陰キャ」というものにした。この言葉はもともとネット上でネガティブに使わる「ネットスラング」であったが、今はその範疇を超えて今や一般に広まりつつある。しかしその使われ方は一定でないように思われ、今回の検証に利用しようと考えた。

方法

Google formを利用し、言語学B受講者に調査の協力をお願いした。また、回答の際に「陰キャ」という単語を初めて聞いた人以外に回答をしてもらった。

結果

25件の回答のうち「陰キャ」という言葉を知っていると答えたのが全員であり、そのうち空白でない回答が22件集まった。回答者によってさまざまな答えが返ってきた。特に多く含まれている単語として、8件に含まれていた「コミュニケーション」や3件ずつ含まれていた「社交」「内向」が挙げられる。また全体の回答パターンとして、コミュニケーションに必要な要素を実行することができないという「コミュニケーションの技術」について言及したものと、そもそもコミュニケーションをあまり好まない「コミュニケーションへの消極性」について言及したもの、そしてそれらを両方含んでいる回答の３種類に大別することができた。「コミュニケーションの技術」にのみ言及した回答は６件であり全体の27.2%となった。「コミュニケーションへの消極性」にのみ言及した回答は12件であり全体の54.5%となった。そして両方へ言及した回答は4件であり全体の18.1%となった。

結論：一つの言葉の理解には幅が生まれている。

表1：回答のパターン（回答は一部）

コミュニケーションの技術

- 目を見て喋らない
- 人と関わることが苦手な人
- コミュニケーション能力が低い人
- 初めましての人に対して、コミュニケーションが円滑に取れないひと
- 自信とコミュニケーション面のマイナスな点で同じである人
- 人前に出るのが苦手

両方を含む

- コミュニケーションに対して自信がなく引っ込み思案であったり、ハイテンションな雰囲気に馴染めなかったりする人への自称や蔑称
- コミュニケーション能力に乏しい人や交友関係が少ない人、会話を　あまりしない人の総称
- 自分から積極的に話さないかつコミュニケーションが苦手
- 暗い人、コミュニケーションが苦手な人

コミュニケーションへの消極性

- 社交的ではなく一部の気が合う人としか話そうとしない
- 社交性が乏しいこと、またそのような人
- 人を大まかに二つに分類したときの社交的でないほう
- 内向的な性格の人
- 内向的である一方で人とは接したいという欲求が空回っている
- 内向的で、過度に人と関わることを好まない人
- おとなしい人
- 積極的に人と関わることをしない人間
- 暗い人
- 根暗でコミュニケーションをとるより自分で考える方が好きな人

考察

結果から、一つの言葉について異なる意味理解がされる場合があることが分かった。

これは「シーニュの担っている概念xと、それを表現する聴覚映像yとの間には、いささかも自然的かつ論理的絆がない」という記号論の主張に合っていると考えられる。聴覚映像y（今回でいえばyは「陰キャ」）が社会的に固定されてしまった場合に、それぞれの人の概念xに幅が生まれてしまっているのではないだろうか。

今回の調査では言語学B受講者を対象としたが、母数が少なく年代が20歳前後に固まってしまったのは改善点である。今回参考にした文化庁の調査では、16歳から70代までのより幅広い年代に対して調査することで年代ごとの意味理解の偏りを調査していた。これによって、「陰キャ」という言葉の年代別の捉え方も見えてくるかもしれない。

また今回は「陰キャ」という言葉の調査のみだったが、他の言葉も調査することで初めて言語全体の意味理解の恣意性を明らかにできると考える。さらに、意味理解の幅が出にくい言葉と出やすい言葉の違いを考察することで我々が使用する言葉の中でも注意しなくてはいけない言葉とは何なのかが分かってくるのではないか。

おわりに

「陰キャ」という言葉を調べることでその捉えられ方が複数に分かれることが分かり、普段何気なく使っている言葉の恣意性の一部を検証することができた。この検証により、私たちが本当の意味で相互理解をしあうためにはお互いがお互いの言葉の前提となっているものを確認し合い、恣意性の壁を超える必要性があることを痛感した。

文献

丸山圭三郎，ソシュールの思想，丸山圭三郎著作集Ⅰ，岩波書店，2014，158ページ.

参考資料

文化庁，令和四年度「国語に関する世論調査」の結果について.